

熊野の
ホ林から

怪野の熊野

「本宮町の怪異(其の五) 牛鬼(うしおに)」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



本宮の牛鬼(うしおに)は、淵や滝壺にすむという。だから、昔は日暮れ後には川には近づかないようにしていた。(イラストはBoBo)

おかしくなつてしまつた人もいたそう
だ。ここまでの話は、
熊野の他の地でも
聞かれる牛鬼の話
とだいたい同じだ
が、今では無住地と
なつて野竹に
は、牛鬼は夜になる

其の五



本宮の各地では、頭が鬼で首から下が牛の姿をした魔物「牛鬼(うしおに)」が出たという。淵によく出るため、昔は日暮れ後には淵のある所を通らなかつたという。牛鬼を見て寝込んでしまい、頭がおかしくなつてしまつた人もいたそうだ。ここまでの話は、熊野の他の地でも聞かれる牛鬼の話とだいたい同じだが、今では無住地となつて野竹には、牛鬼は夜になる



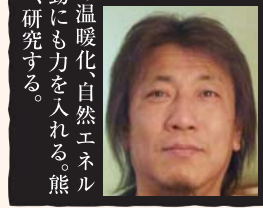
沖縄の新城(あらぐすく)島にすむキジムナーは、夜になると大きな牛の姿をして島の中を徘徊するという。古老の話では、写真の場所が、よく目撃されるポイントだとのことだったが、出会うことはできなかった。

と川から上がったきて、家の牛小屋に来ては牛を引くという特徴的な話が伝わっていた。牛を引くというのは、水の中に連れ込むという意味だと受け取れる。それだけでなく、牛鬼は夜に音もなくやってきて音もなく帰って行くが、来たことだけは分かる、という野竹だけで聞かれた話も残る。これは、妖怪研究者で著名な水木しげる氏が沖縄の新城(あらぐすく)島で聞き取ってこられたキジムナーの話にも通じる話だ。

沖繩各地に出るといふキジムナーは、一般にはガジマルの木にすむ森の精霊のような存在だとされ、奄美大島のケンムン、インドネシアのダニアンの話と似ている。新城島のキジムナーは、海にすむ河童のような魔物で、海と川の違いはあるものの紀ノ川の河童(かづね)ガタロの話との共通性が多い。さらに、新城島のキジムナーは、夜になると大きな牛のような姿で島の中を徘徊(はいかい)するとのこと

で、野竹の牛鬼の話と少し似ている。実は、筆者も新城島で聞き取り調査を行ったことがあるが、その際、水木先生が書かれた内容と全く同じ話を島のオジイ西老松(にしおいまつ)氏から聞いた。当時の新城島は、平常時人口が4名だったことから、きつと水木先生も西老松のオジイから話を聞いたんだなと思ひ、質問してみたら「そうだ」との返事が返ってきた。なんか嬉しかった。

保全生態学者として日本で最も有名な学者、鷲谷(わしたに)いづみ先生から聞いた話だが、奄美大島では森と海の精霊ケンムンのすめるレベルで自然を再生しようというプロジェクトが始まっている。熊野もたくさん妖怪がすむ地。牛鬼がすむのはさすがに危険だが、他の安全な妖怪がすめるレベルの熊野の自然再生、そんなプロジェクトを起すことはできないものだろうか？



中島敦司(なかしま あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。